

ほっかいどう NIE 通信

Newspaper in Education



発行 北海道 NIE 推進協議会

〒060-8711

札幌市中央区大通西3丁目6

北海道新聞社内

☎011-210-5802

FAX 011-210-5826

2012年度 推進協総会

道NIE推進協議会(高辻清敏会長)の2012年度の総会が5月12日、札幌市中央区内の北海道新聞本社で開かれた。新規指定校を含む41校が新聞協会と道推進協議会の指定を受けて実践に取り組みほか、石狩管内で初となる北広島市を含む全道10カ所でのセミナーを開くことを決めた(関連記事2面に)。

新規実践の13校決まる

北広島で管内初のセミナー

実践指定は、日本新聞協会の認定が31校と昨年より2校減った。道協議会の独自認定は昨年と同数の10校。この結果、全道の41校が本年度の指定校となり、7月に開く新聞協会の博物館・NIE委員会で正式に決まる。総会にはNIE活動に取り組む道内の小、中、高の教諭ら60人が出席。道教育庁学校教育課の河原範毅主幹、札幌市教委学校教育部指導室の上田繁成・指導主事らが来賓として挨拶した。



参加者などが一部マンネリ化した事態を憂慮しつつ、「理性と知性で時流を作る市民を育てるのが教育であり、その一端を担うのがNIE」と、生きた教材をどう教育の場に提供していくかを本年度の課題の一つに挙げた。承認された事業では、地区セミナーとして昨年初開催した稚内市に続き、教師や児童・生徒が最も集中する石狩管内で初めて8月8日に北広島市で開く。一方、3回目を迎える「夏休み親子新聞教室」は昨年より日程を早め、7月27日に開くことにした。また、新しく仲間入りする新規実践校の紹介も行われ、出席した10校を代表して釧路市立菅野小の渥美清孝教諭が「新聞の力を信じ、

- ▽旭川市立旭川中(菅原大)
- ▽釧路市立菅野小(渥美清孝)
- ▽室蘭市立翔陽中(宗像美貴子)
- ▽池田町立池田中(斉藤貴之)
- ▽旭川市立永山南中(高橋寛光)
- ▽札幌市立中島中(鈴木真之介)
- ▽岩見沢市立明成中(山本あさ子)
- ▽鹿追町立鹿追中(都島秀史)
- ▽幕別町立明倫小(阿部英一)
- ▽札幌市立屯田北小(朝倉一民)
- ▽興部高(朝妻秀)
- ◇道NIE推進協
- ▽北翔大学短大部(菊地達夫)
- ▽札幌大谷大(小田原賢二)

平成23年から25年にかけて順次実施される小・中・高校の学習指導要領では、前回改定で初めて登場した「生きる力の育成」という理念が継承されています。学校教育の目的を、社会状況と関連づけながら、子どもたちに将来必要な資質や能力をバランス良く育んでいくこととし、これを「生きる力の育成」と短く表現したものです。

学習指導要領は子どもが何を学ぶかを具体的に定めているので、将来の社会状況をいかに予測し、そこで必要な資質や能力をどうとらえるかがポイントになる



批判的に読む力育てたい

札幌清田高校長 西村 喜憲

育てる、ということに私は注目しています。「民主主義の基本は情報公開から」といわれるように、メディア、とりわけ新聞は近代市民社会の形成

と為政者への批判性という「下意上達性」の両面を兼ね備えた、政治と密接に関わるメディアとして、時代に翻弄(ほんろう)されながら今日に至っていること

ることが大切だと思えます。私はかつて「東京裁判勝者の裁き」の著者であるマサチューセッツ州立大アマースト校元教授のリチャード・H・マイニアさんから「疑ってみる、批判的に読む、そうしないと、物事の本質に迫れない」と直接教わったことがあります。対象を多面的に理解し、判断することが市民に求められておられると思います。子どもたちが、将来の民主主義社会の担い手として、このような姿勢をNIEの学習から学ぶことが出来るれば幸いです。

紙面構成学び新聞づくり

授業での新聞記事の活用例などを報告し合う、道NIE推進協議会のセミナーが6月8日、釧路市を皮切りにスタート、同市立芦野小の渥美清孝教諭の公開授業などが行われ、60人が参加した。来年2月まで全道10地区で順次開催する。日程と会場(開催市)は別表。

芦野小の公開授業には実践教諭のほか、道教大釧路校の学生や地元新聞販売店関係者などが参加した。渥美教諭が「新聞を作ろう」をテーマに5年3組の授業を公開したII写真II。

同教諭は「編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読む」というポイントを理解させ、リード、本文、題字を意識しながら学校の特色を記事にまとめさせる授業を試みた。教本の記事を用紙いっぱい

名称	開催期日	場所
釧路	6月8日	芦野小(釧路)
函館・渡島	6月22日	的場中(函館)
北広島・石狩	8月8日	石狩教育研修センター
北見・オホーツク	9月7日	網走小
岩見沢・空知	10月26日	三笠小
稚内・宗谷	11月3日	市立図書館(稚内)
苫小牧・日高	12月5日	清水小(苫小牧)
旭川	12月7日	永山南中(旭川)
室蘭・胆振	2013年1月25日	虻田小
帯広・十勝	2月9日	道新帯広支社



い、しっかりと書き込む児童が多く、ふだんのきめ細かな指導ぶりが明らかになった。児童は最後にグループでお互いの記事を発表し合った。実践発表は3人が行った。釧路市立東雲小の山本真吾教諭は、総合学習の時間を中心に、児童に記事を読み聞かせ、学級通信にも掲載して保護者の目に触れさせる取り組みを披露した。東日本大震災の記事を、自

身のボランティア体験も交えながら、「復興に向け、希望を伝える内容を心がけた」と暗い内容のままで終わらないよう配慮した点などを説明した。同青陵中の岩瀬希代美教諭は、がん肉腫を告知されながら意志を貫いて出産し、わが子の幸せを願いながら29歳で亡くなった看護師鎌田茜さんを取り上げた北海道新聞の記事を使った道徳の授業を報告した。親の愛を自分の問題としてとらえてもらうため、保護者全員にわが子への気持ちを密かに手紙に書いてもらい、教室でその手紙を開封させ、生徒たちが感動と感謝の気持ちに傾いていった様子を紹介した。中標津高の石川拓郎教諭は、前任校の白糠高で取り組んだ投稿活動などを紹介。自らの考えをことばで表現し、社会とのつながりを確認させるため、自分の

キヤッチコピーを考えさせる授業などを報告した。石川教諭は「新聞は必ず教材

道NIE研総会

北広島で夏季研修会

道NIE研究会の定期総会が5月12日に北海道新聞本社で開かれ、事業計画と新役員を決めた。本年度の事業では夏季研修会を道NIE推進協の第1回北広島・石狩セミナー(8月8日・北広島市の石

新規実践者に助言

アドバイザー懇談

春に一新されたNIEアドバイザーを交えた懇談会が5月12日、道NIE推進協総会の席で行われた。新規にNIE活動と取り組む実践教諭に活動のポイントなどを学んでもらう試み。三笠小の柳谷直明教頭、帯広・西陵中の野上泰宏教頭、旭川・春光台中の福澤秀教頭、札幌似工高の佐藤啓貢教頭の4人のアドバイザーが質問を受ける形で進められた。

コラムを書き出す活動と取り組む若手からは「同僚に面倒なこと、やめたら」と言われた」とNIEを取り巻く依然、厳しい現状を紹介され、「教師のうち、自宅で新聞を取っているのは校長と私だけ」といった悲しい実態も報告された。柳谷教頭は新聞が読めるコーナーの設置や震災などテーマ別に記事を集める手

になる記事が見つかる」と素材の宝庫である点を強調した。

狩教育研修センター)に合わせて初めて札幌市以外で開くほか、10月18日の道NIE研究大会(全道大会)を札幌市立屯田北小で開く。主な役員は次の通り。▽会長 豊島義明(札幌

法を紹介。「新聞はきちんと並べるよりなるべく広げておく」など、身近に感じさせる工夫を披露した。福沢教頭は「新学習指導要領はスキルの一つで、それ自体目的ではない」と視点的持ち方を指導。「NIEは気軽に活用しないとうまくいかない」と自然体を強調した。野上教頭は「教材が児童

市立定山溪中校長)▽副会長 上村尚生(同稲穂小校長) 原努(同藤野中校長) 毛利慎晴(札幌丘高教諭) 高瀬敏樹(同旭丘高教諭) 支部長 道央支部 山田秀哉(札幌市立稲穂小教諭) 道南支部 金子賢(函館市立的場中教諭) 道北支部 福澤秀(旭川市立春光台中教頭) 道東支部 野上泰宏(帯広市立西陵中教頭) 事務局長 檜克博(札幌市立三角山小教諭) II 敬称略

の興味とマッチすると、意欲が変わる」と教材選びに大きく左右される点を強調。佐藤教諭は「たくさんやらないと達成感がない」と一定量をこなす必要性に言及した。前アドバイザーの菊池安吉旭川中校長は「NIEの仲間づくりを進め、足し算ではなく、かけ算で活動の輪を広げていきたい」と締めくくった。

道NIE推進協2012年度役員

(6月25日現在) 敬称略

顧問	高橋 教一	北海道教育委員会教育長
同	北原 敬文	札幌市教育委員会教育長
会長	高辻 清敏	日本NIE学会理事
副会長	高梨 俊一	道教育庁学校教育局長
同	金山 正彦	札幌市教委学校教育部長
同	豊島 義明	北海道NIE研究会会長
同	舟越 洋二	北海道十勝新聞教育研究会会長
同	三好 則男	北海道新聞経営企画局長
幹事	新貝 晃一	日本経済新聞札幌支社編集部長
同	倉沢 章夫	時事通信札幌支社長
同	中山 歳	苫小牧民報札幌支社長
同	堀川 勉	道新NIE推進センター長
監事	星 春海	読売新聞北海道支社編集部長
同	玉置 薫	釧路新聞札幌支社長

スクラップ新聞に挑戦

情報収集・意見も発信

興味を持った新聞記事を切り抜き、テーマに沿って自分の新聞をつくるスクラップ新聞づくりが、空知の三笠小で行われた。新聞を読む機会が少ない児童たちも約1時間半、集中力を持続させて記事の切り貼りに取り組んだ。(北海道新聞NIE推進センター委員・大井一樹)

空知・三笠小

国語教育の研究グループに属し、国語学力を育てる参考書の出版経験もある同小の柳谷直明教頭が、より効果的な新聞活用授業を、と当協議会事務局に相談して実現した。
小学校の教科書は、新学習指導要領の下では4年生で新聞づくりを、5・6年生

実践校
レポート



生で新聞の読み方を学習するが、その発展型として初めて試みた。
5月11日の3・4校時、5・6年生の91人が参加した。協議会の夏休み親子新聞スクラップ教室でも指導している日下部憲一コーディネーターを講師に、道新の朝・夕刊と小学生新聞「道新週刊フムフム」を一人1部ずつ配布。新聞提供事業で同小が購読している日経新聞など各紙も加えて体育館の床の上に広げて作業を始めた。
日下部コーディネーターは、教師が参考用につくった作品を見せながら「面白い記事」「興味のある話題」「おもしろい写真」を記事や広告から選ぶように指示。「選んだらどんどん切り抜く」「スクラップと同じように貼る」「台紙に貼って自分の新聞をつくる」とスクラップ方法を紹介した。さらに「こんなに面白かった、興味わいた記事を切り抜いて自分だけの新聞をつくる三笠小の児童たち

った、こういう点に関心を持ったなど、自分の言葉で説明します」と本人の感想や意見を書き込むようアドバイスした。
柳谷教頭もマイクで呼びかけながら、両学年の担任教諭と共に児童の間を巡回。レイアウトや記事選びに困っている児童には記事の見つけ方やコメントの付け方を指導するなど、時間内に大体、完成させた。
児童会長も務める阿部穂乃加さん(6年)は原発関連記事を切り抜いたものの、スペースの関係から「節電を中心にした話に絞った」と身近な視点でまとめた理由を説明した。

夏に2つの全国大会

全研 8月3・4日帯広で

第55回全国新聞教育研究大会北海道十勝・帯広大会が8月3、4日、とちぎプラザ(帯広市西4南13)で開かれる。
全国新聞教育研究協議会(木野村雅子会長)と北海道十勝新聞教育研究会(舟越洋二会長)の主催。「新しい教育課程を創造する新聞教育」を主題に、全国学校新聞指導者講習会を兼ねて開く。帯広での開催は7年ぶり3度目。
開会式は3日午後零時20分から。帯広を含む周辺市町の4教諭による公開授業や分科会討議を行う。
引き続きパネルディスカッション。十勝毎日新聞の

このほか、「春のお花新聞」「ロンドンへ」「災害新聞」など、人の気持ちや取り上げた記事の中身を考えながら大きな字で、分かりやすく仕上げた作品が多かった。分かった事実を紹介し、自分の思いをまとめる言葉を探すにはどうすれば良いかなど読解や表現力を高める効果も一部、見られた。
この春、協議会のアドバイザーになった柳谷教頭は「いつもがんばる三笠小の子どもたちが、体育館でこれだけの時間、集中できたのはすごい」とスクラップ新聞の効果にあためて驚いた様子だった。

親子新聞教室 参加者を募集

7月27日午前10時から正午まで北海道新聞本社(2階A会議室)で開く第3回「夏休み親子新聞教室」の参加者を当協議会で募集している。はさみ、のり、マーカーなどを持参。参加者氏名(児童は学校、学年も)、郵便番号、住所、電話番号を書いてはがきかFAX(011・210・5826)で。先着50組まで。問い合わせは7060・8711札幌市中央区大通西3の6、北海道新聞社内、道NIE推進協議会事務局☎210・5802へ。

道内高校新聞

ナウ

2

さまざまな素材の、何をどう取り上げて伝えるか。想像力あふれる全局員による企画会議は休日をはさみ計3日12時間に及んだ。分厚い企画書をめくりプレゼンテーションし、出た意見を元に練り上げていく。狙いとかげ離れた取材になることも珍しくない。が、事前にもできる限り詰めていく手法。そのやりとりを見て下級生もノウハウを学ぶ。会議を仕切る篠田颯一郎編集長(3年)は時にユーモアを交え、局員のアイデアをいじってみせる。意図するところやポイントを引き出すためだ。

7月号は原発を含むエネルギー大特集を組んだ。「みんなできてる気持ちを持たせたい」に、会議は自由に発言できるものにする。困るのは自分の考えをまとめる時間がないこと」と絶妙

の運びの極意を明かす。局員21人をまとめる森龍弘局長(3年)は3年間の集大成としてメイン記事を担当する。「高校生が書く意味を重視し、個人の思いを出していく」と心掛けてきた原点を再確認する。大

学紹介に比重が移ってきた記事下広告を取り続けるのもこの新聞の特徴だ。柏葉高新聞のいまがあるのは、一度生まれ変わったから。1995年から1

年半、活動が途絶えた。そしてまったく違う形に生まれ変わった。最初は顧問も一緒に土台づくりに参加。再生直後から文部大臣賞、朝日新聞社賞など輝かしい賞が続いた。他校を圧倒する、突出した入賞回数に、一部から「校内の記事が少ない。賞狙い」などの心ない批判もあった。

「土台がしっかりしていなければ大胆に切り込めない」(田口教諭)。かつての留萌高新聞の衣鉢を継ぐ「正統派」との自負がある。最大26ページの本紙は年4回、ほか速報版「とかちばれ」も発行。タブロイド判の印刷は市内の印刷会社に発注する。

その後も市町村合併、酪農経営、そして農業団体が猛反発する環太平洋連携協定(TPP)を取り上げる。高校生には重過ぎるテーマに挑み、迷いつつ掘り下げてゆく。

校内の生徒の関心は高い。「生徒が決めた企画だからほとんど進めていくだけ。きつい取材だからこそ、発行にこぎ着けた達成感も大きい。生徒も育つ」と田口教諭。知的探求心を刺激し、教師冥利(みより)に尽きる喜びを同じ顧問の岩田勝美教諭と共にかみしめる。



(帯広)

地域に密着 粘り強い取材



「読まれる記事とは」一。企画会議で構想を練る局員たち

168号(2000年7月25日)の「マイノリティを追って」は学校編の「不登校」と社会編の「アイヌ民族」の重いテーマ二つを同時に扱った。「アイヌ文化はすぐ近くにある」として二風谷の資料館長だった故萱野茂さんも取材した。

1923年(大正12年)創立の旧制帯広中から来年で90年。普通科7。道東地区の拠点校で、地域医療を支える医進類型指定校、地元・帯畜大と高大連携活動も。柏葉高新聞は1952年の創刊。

地域の推進協議会は1994年、新潟県で全国初の組織が誕生して以来、道の推進協を含む各都道府県で設立が相次いでいた。2010年6月に大分県、11年5月には愛知県、三重県で相次いで組織が誕生し、残るは富山県のみとなっていた。

編集後記

○…「新聞は使ってもらってこそ意味がある」。北海道新聞社のNIE講演会で、鳴門教育大の阪根健二教授が新聞の原点にこう触れていた。○…新聞記者を父に持ち、自身は教職。教育とメディア双方の立場を知る、数少ない研究者の一人として「異文化」の「相互不信」による無用な対立を避け、「緊張感のある信頼」と「協働関係」にもっていくリテラシーの重要性を訴えた。「情報とは情を読むこと」「記事の向こうに人がいる」など、話の多くに共感させられた。○…いかに多くの情報を知らぬまま素通りしているか、後で思い知らされることはない。そこにある情報を、活用しない手はない。「食わず嫌い」を排し、「使ってやろう」の意思を求めたい。教育現場での新聞の使い出は大いにある。(大)

富山県に協議会 全国に体制整う

NIE推進協議会の未組織地域として残っていた富山県で5月10日、富山県NIE推進協議会が立ち上げられ、これで47都道府県すべてに協議会が出そろった。

連絡会から「格上げ」された同協議会は、北日本、北國富山、北陸中日、朝日、毎日、読売、日本経済の7紙と共同、時事の両通信社、県教委、県の小学校、中学校校長会などで構成。運営費は9社の会費でまかない、事務局は北日本新聞社に置く。